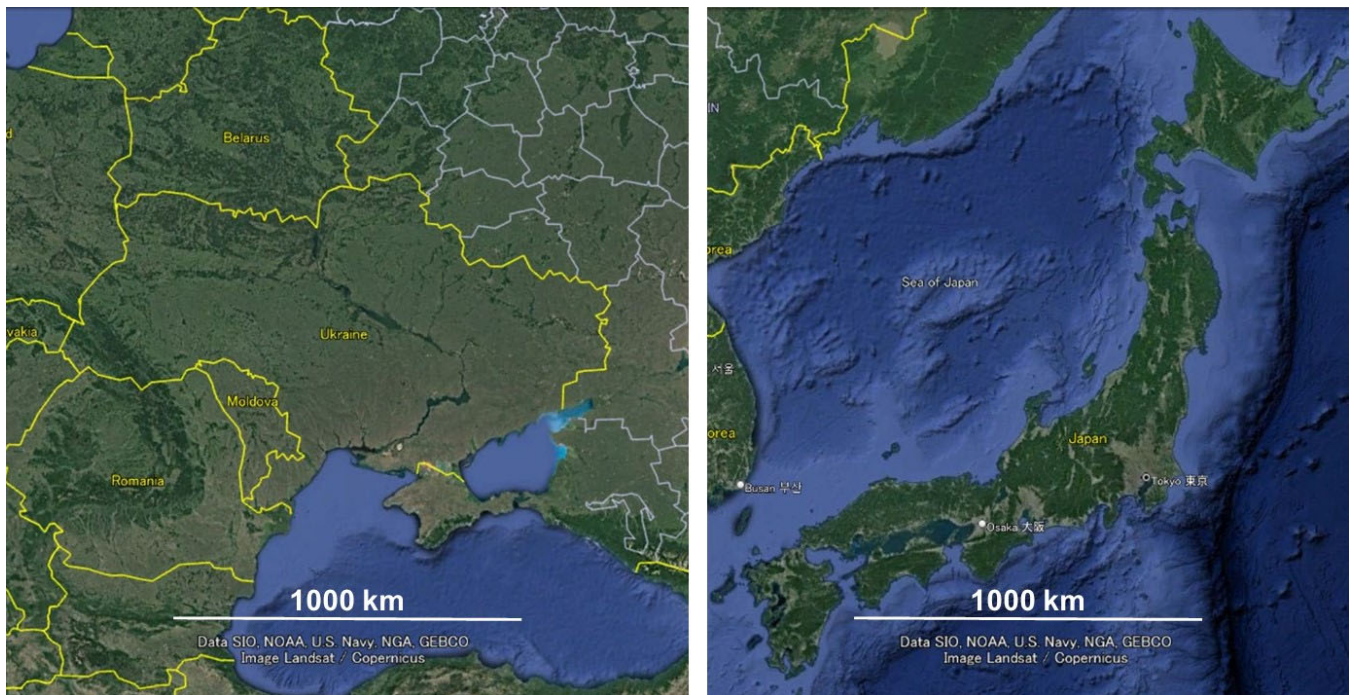


## 編集後記—ウクライナへの思いとともに

ロシアによるウクライナ侵攻が今後どのような展開になるにせよ、21世紀の世界を揺るがす極めて重大な、かつ歴史の転換点ともなる出来事の一つであることは間違いありません。本来、京機短信のスコープ外とは思いつつも、この憂うべき侵攻に関し、なんらかの形で話題として取り上げるとともに2022年の記録として残しておきたいと考え、素人ながら4月号・5月号に続けさせていただきます。

今回はまず、ウクライナと日本の国土を比較してみます。下図に同縮尺で対比してみました。ウクライナは日本の約1.6倍の面積ですが、細長い日本は相対的に大きく見えるような気がします。一見して、山地ばかりで小さな平野が散在する日本とは対照的に広大な平原の広がるウクライナに気付きます。特に攻防の激しい東部に注目すると千キロ—東海道・山陽道に匹敵する範囲に及ぶことが分かり、このような広域が戦場となっている恐ろしさは想像を絶します。



Google Earth より（クリミヤ半島との間に黄色い境界線がありますが、暫定的表示と理解します。）

また、2022年2月以前にウクライナの国旗を知っていた人は、それほど多くはなかっただろうと推察します（もちろん筆者も知りませんでした）。それが不幸な理由で世界中に知られるようになりました。以下のようにブリタニカによりますと、現在のウクライナ国旗は約100年前に上下の色が反転したものだそうです。

**The first national flag for Ukraine was adopted in 1848 by revolutionaries who wanted its western parts to be freed from Austro-Hungarian rule. They based their flag, consisting of equal horizontal stripes of yellow over blue, on the colours of the coat of arms used by the city of Lviv. The arms showed a golden lion on a blue shield, an emblem dating back many centuries. Late in 1918 the decision was made to reverse the stripes of the 1848 flag to reflect the symbolism of “blue skies over golden wheat fields.”**

<https://www.britannica.com/topic/flag-of-Ukraine>

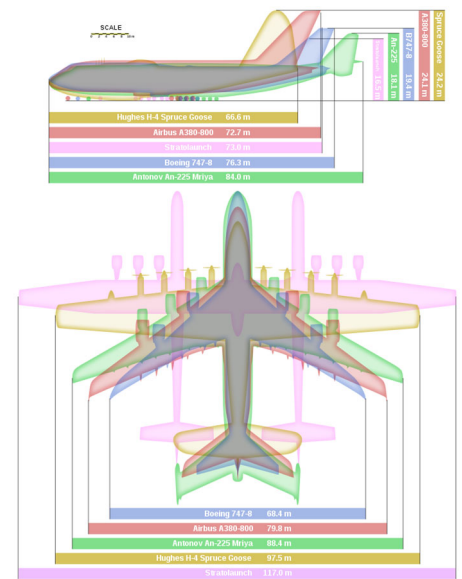
ウクライナを象徴する黄金色の小麦畑の地平、あるいはソフィア・ローレンとマルチェロ・マストロヤニの映画でも有名になったひまわり畑の地平と、青空の風景を思い浮かべるたびにやるせない気持ちになります。

貴重な機械も犠牲になりました。米国アポロ計画リーダーのフォン・ブラウン（1912–1977）に対し、ソ連側リーダーのコロリョフ（1907–1966）を輩出したウクライナは、科学技術でも傑出した面があります。ロシア出身ですが高名な航空機設計者アントノフ（1906–1984）の名を冠するアントノウ社 (<https://antonov.com/en>) はウクライナの国営企業で、同社のAn-225 “ムリーヤ”(ウクライナ語で“dream”の意、NATOコードネームは“Cossack”、右図で緑色) は世界一巨大な飛行機(最大離陸重量640トン、ペイロード250トン: ちなみに新幹線N700Sの16両編成は700トン弱)です。エンジンはウクライナ出身の技術者イーウチェンコ(1903–1968)の名を冠するイーフチェンコ=プログレース社 (<https://ivchenko-progress.com/?lang=en>) 製。東日本大震災ではフランスからの救援物資などを運んでくれましたが、侵攻開始直後に破壊されました。人命、生活の場、国土、機械も失われる破壊—なんと罪深いことでしょう。

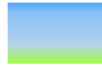
なお余談ながら、NHKとアメリカABCの国際共同取材で1995～6年に連続放送された「映像の世紀」(<https://www.nhk.or.jp/special/eizo/>) の「第3集」がカラー化されて3月28日に放送されました。ご覧になった方も少なくないと思いますが、27年前に見逃した筆者は、たいへん遅ればせながらこの機会に全編

第1集「20世紀の幕開け カメラは歴史の断片をとらえ始めた」  
 第2集「大量殺戮の完成 塹壕の兵士たちは凄まじい兵器の出現を見た」  
 第3集「それはマンハッタンから始まった 噴き出した大衆社会の欲望が時代を動かした」  
 第4集「ヒトラーの野望 人々は民族の復興を掲げたナチス・ドイツに未来を託した」  
 第5集「世界は地獄を見た 無差別爆撃、ホロコースト、そして原爆」  
 第6集「独立の旗の下に 祖国統一に向けて、アジアは苦難の道を歩んだ」  
 第7集「勝者の世界分割 東西の冷戦はヤルタ会談から始まった」  
 第8集「恐怖の中の平和 東西の首脳は最終兵器・核を背負って対峙した」  
 第9集「ベトナムの衝撃 アメリカ社会が揺らぎ始めた」  
 第10集「民族の悲劇果てしなく 絶え間ない戦火、さまよう民の慟哭があった」  
 第11集「JAPAN 世界が見た明治・大正・昭和」

を見てみました。戦争に明け暮れた20世紀の悲惨で（殺傷や死体を含めた）凄惨なシーンが多く、比較的穏やかな第3集以外は、もしカラー化されたら見るに堪えなかったと思います。悲愴なテーマ音楽「パリは燃えているか」が頭から離れなくなるような重苦しい内容ばかりですが、平和な世界を当たり前のように受け止めていた筆者には、書物からだけでは実感できなかつたインパクトを与えられ、過去の歴史の延長線上で今回の侵攻を考える一助にもなったことを付記します。



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Giant\\_planes\\_comparison.svg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Giant_planes_comparison.svg)



ウクライナ国旗のような水平な2色の組み合わせという点では、編集人も344号(2020年8月)から表紙ヘッダーのカラーを、以前の濃紺一色から、黄緑色→空色とグラデーションで変わるものに更新しました。これは、たとえば映画「男はつらいよ」で川べりの土手のシーン——草が茂った土手から青空を見上げるイメージなどから想起したのですが、このような更新を思い立ったのは、新型コロナウイルス感染で暗くなった世の中の雰囲気をも少しでも明るくしたい気持ちからでした。前述したように筆者はつい先日までウクライナ国旗は知らなかったものの、地平から青空を見上げる気持ちには共通するものがあつたと思っています。

京機短信は、Founding Editor 久保愛三さんによる12年半で300号発行の偉業のあと、2017年5月の301号から2022年6月の369号(平成最後の2年から令和最初の3年の過渡期5年2ヶ月)の編集を担当させていただきましたが、本号をもちまして編集を交代させていただきます。この5年間、国の内外では悲しく辛いことが多く、とりわけ本号を含めて直近3号ではウクライナを話題にせずにはいられない心境でしたが、京機会内では楽しく有意義な世界に浸ることができました。

末筆ながら、ご多用中にもかかわらず貴重な記事を寄稿いただきました著者のみなさま、また美しい写真や絵を転載させていただきました方々に心からの感謝を申し上げます。

編集人 吉田英生 (S53/1978卒)  
e-mail: sakura@hideoyoshida.com